国際理解・国際協力のための
作文・感想文コンテスト

2020

優秀作品集

日本国際連合協会山口県本部

序

国際連合（国連）は、世界の平和と経済・社会の発展のために協力することを誓った独立国が集まって設立された機関で、現在193ヵ国が加盟し、日本は昭和31年（1956年）に加盟しました。

山口県では、昭和27年（1952年）に「県民の運動として国連の目的実現に協力すること」を目的に、日本国際連合協会山口県本部を設立して以来、県民の皆様に国際社会の平和や安全をはじめ貧困等の諸問題を身近に考えていただき、国連の役割や国際理解を一層深めていただけるよう活動を行っています。

今年度の、「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」、「高校生によるSDGs に関する感想文コンテスト」では、県内から多数の御応募をいただき、その中から、優秀な作品を選び、この作品集に掲載しましたので、ぜひご一読ください。

日本国際連合協会山口県本部
本部長　加登田　惠子

＜日本国際連合協会山口県本部について＞

主な活動内容

- 「国際理解・国際協力講演会」等の開催
- 各種コンテストの開催
  「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」
  「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」
  「外国人による日本語スピーチコンテスト」

ホームページ

http://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/

国際理解･国際協力のための作文･感想文コンテスト2020

優秀作品集目次

中学生の部　第 60 回　国際理解･国際協力のための中学生作文コンテスト

◆　特賞（山口県知事賞）
『世界平和の実現に向けて、私ができること』
高水高等学校付属中学校　３年　古　川　匠　2

◆　特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）
『国連創設１００周年の２０４５年、こんな世界にしたい』
～国境のない世界へ～
野田学園中学校　３年　牛　見　ささら　4

◆　優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）
『世界平和の実現に向けて、私ができること』
～人一人の心を大切に～
山口市立秋穂中学校　３年　久　保　愛　来　6

◆　優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）
『世界平和の実現に向けて、私ができること』
高水高等学校付属中学校　３年　岡　田　凜　華　8

◆　特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）
『ＳＤＧｓが目指す「誰も取り残さない」社会を作るために、自分には何ができるか』
野田学園中学校　３年　野　花　みなみ　１０

高校生の部　第 27 回 高校生による SDGs に関する感想文コンテスト

◆ 特賞（山口県知事賞）

SDGs⑯：平和と公正をすべての人に
『善と平和の着眼点』
山口県立華陵高等学校　２年　小　田　陽菜実　１３

◆ 特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）

SDGs①：貧困をなくそう
『貧困と夢と私』
サビエル高等学校　２年　大　村　咲　葵　１５

◆ 優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）

SDGs③：すべての人に健康と福祉を
『忘れない存在』
山口県立徳山商工高等学校　３年　田　村　唯　菜　１７

◆ 優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）

SDGs③：すべての人に健康と福祉を
『医療問題にどう向き合うか』
高水高等学校　２年　松　本　彪　１９

◆ 特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）

SDGs⑤：ジェンダー平等を実現しよう
『性別が社会進出の足かせにならない未来へ』
野田学園高等学校　２年　河　村　樹　里　２１

◆ 佳作

SDGs④：質の高い教育をみんなに
『よりよい教育を受けるために』
山口県立華陵高等学校　２年　山　本　結　花　２３

◆ 佳作

SDGs⑤：ジェンダー平等を実現しよう
『男女平等の国づくり』
山口県立徳山商工高等学校　３年　水　津　葵　２５

第60回

国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト

優　秀　作　品　集

特賞（山口県知事賞）
世界平和の実現に向けて、私ができること

高水高等学校付属中学校　3年　**古　川　　匠**（こがわ　たくみ）

世界平和の実現に向けて、私ができることは、一人でも多くの人と会話をすることではないかと考えます。

それは、ある出来事がきっかけで、そう考えるようになりました。私が小学六年生の時ホストファミリーを経験しました。当時姉は中学三年で、その姉と同じ歳のオーストラリア人の女の子が我が家にやって来ました。姉と彼女は英語で会話をしていましたが、小学六年の私は英語を話せませんでした。でも彼女が初めて私の家に来た日、私達は不思議な体験をしました。姉が歓迎の気持ちを表そうとショパンのワルツをピアノで弾いたのです。すると彼女は、ジョンレノンのイマジンを弾いてくれました。その後自然と私の番になりモーツァルトのマーチを弾き、しばらく三人で順番にピアノを弾いて過ごしました。歴史上の大作曲家や世界的なヒット曲が私達三人を、音楽で会話をさせてくれたように感じました。そして、いつの間にか英語を話せない私も身振り手振りでコミュニケーションがとれるようになっていました。その時、言葉が通じなくても意志を伝え合うことができると知りました。とても幸せな気持ちでした。

以前テレビで英会話のできないタレントさんが外国で現地の人に道を教えてもらいながら、目的地に行くというのを見た事があります。その人は、拙い英語力にもかかわらず目的地に着く事ができました。辿り着きたいという熱意が伝わったのだと思いました。

また、こんな事もありました。私の祖父は認知症を患い、わからない事が多かったのですが、姉はいつも根気強く祖父に話しかけていました。祖父を思いながら、選ぶ言葉は優しさがあふれていました。祖父と姉の姿から会話の大切さを考えさせられました。会話でわかりあえるという事は、争い事を遠ざけて、安らかで穏やかにすごせるということだと感じました。

ニュースでは、話し合いの場すら持てぬまま、国交断絶に近い状態の国々を報じています。また、一方的な発言に苦しめられることもあるようです。こんな状態は、平和と呼べるのでしょうか。

共通言語がなくても、国や文化や歴史が違っていても、視聴覚に障害があっても、年齢が違っても、例え意見の相違がある人とでも私はどんな人とでも会話ができる

人になりたいです。言葉が通じなければ、私と留学生がピアノで近づくことができたように、何か共通のものがあるかもしれません。視聴覚障害のある方となら点字や手話があります。文字が書ければ筆談だってできます。そういう意味では、ユニバーサルデザインなども会話のツールかもしれません。もっと世界共通のわかりやすいものが沢山あれば、共通言語を持たない国どうしのコミュニケーションに役立つかもしれないと思います。わかり合える機会が増えれば、争いも減るのではないでしょうか。それは、言葉を覚えたばかりの子供どうしの会話に似ているのかもしれません。幼くても、しゃべれなくても会話は成立しているのではないでしょうか。母親と赤ちゃんの会話も言葉がなくても通じ合っています。それは、なぜなのでしょうか。相手を認め、自分を認めてもらって、心を伝えあっているからではないかと思います。互いに認め合えるというのは平和につながると思います。

小学生の時には、しゃべれなかった英語も学び、今では英会話も少しできるようになりました。もしかしたら、今、無駄だと思っている何かも、いつか出会う誰かとの会話に必要で大切なものかもしれません。私はピアノや書道も習っていますが、ピアノを習っていなければ、小学六年の時留学生とコミュニケーションをとれていなかったかもしれません。もっと沢山のことを学び視野を広げ、一人でも多くの人と会話をすることこそが、世界平和の実現に向けて、私ができることです。

特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）
国連創設100周年の2045年、こんな世界にしたい
～国境のない世界へ～

野田学園中学校　3年　**牛見　ささら**　（うしみ　ささら）

今、世界では、貧しく十分な食事を取る事ができない人達がいる。教育を受けることのできない子供達がいる。家がない人達もいる。紛争が起こっている国がある。私はこの事を知っているだけだ。学校の授業で知った事を覚えているだけだ。どうするわけでもなく、ただ知識として持っている。

私は外国に行ったことがない。外国に行く事の出来るチャンスは何度かあった。けれど日本以外の国に行くことが怖かった。なぜなら外国は日本と言語も習慣も宗教も違う。そのうえ私が持っている「外国」についてのイメージはあまり良いものではなかった。私は世界のどこかで毎日に怯えながら生活をしている人達がいることを受け入れる事が怖かったのかもしれない。他国で起こっている出来事をどこか他人事に感じているところがあったからかもしれない。積極的にその人達の生活を知ろうともしてこなかった。私が知ろうとしていない国の人達は恐れることなどないぐらい優しい人達なのかもしれない。その国はとても心があたたまる場所なのかもしれない。逆に、その日一日を乗り越えるために生きること以外のことを考える余裕もない場所なのかもしれない。その国は、水が通っていなかったり学校に行けていない子供達もたくさんいたりするのかもしれない。もしそうであるならば私が現地で小さなことでも手伝うことで一人でも救われる人も出てくるのかもしれない。でもその選択をしていないのは私自身だ。

江戸時代の終わり、日本には長州ファイブと呼ばれた日本の近代化に大きく貢献した五人の長州藩士がいた。徳川幕府の政策に反し彼らは命がけで密航留学をし、西洋の技術を日本に持ち帰った。言語が違う、また先進国の若者であるわけでもない彼らを受け入れてくれたのはロンドン大学である。あの当時、イギリスで唯一、人種や宗教、性別などによる差別無く学生を受け入れた大学である。そして、彼らのロンドン生活はアレキサンダー・ウィリアムソン教授によって成り立っていた。生活の面でも勉強の面でも彼らを支えていたという。日本の経済発展の陰の立役者と言えるだろう。ウィリアムソン教授は当時、三九歳の働き盛りで娘も生まれたばかり。鎖国状態の国の若者を受け入れる覚悟も大きいものだっただろう。教授自身が厳しい生活環境にあったはずだが喜んで異国の地から来た五人を受け入れたそ

うだ。「本物を学んでほしい」という情熱のみで言語、文化、宗教の違う彼らを育てたらしい。私はこのウィリアムソン教授の人としての懐の大きさに尊敬する。自分と住んでいる環境が違うから。宗教が違うから。自分には関係のないことだ。と考えることなく、教授のように国に関係なく一人の人間を受けいれる姿勢がこれからの世界において必要なことだと思う。

私にはウィリアムソン教授のように他の誰かの人生を支えたり、他国の発展を助けたりするような壮大なことはできない。二〇四五年にむけて、二〇二〇年の今、私にできることはないだろうか。まずは色々な国の現状を知ること。文化を知ることや言語を知ることもできる。生活や文化を学ぶことはその国を成り立たせている基礎を学ぶことであり、その国を知る一番の近道だと思う。また、身近にいる外国の人や海外に行ったことのある人から海外で感じたことや考えたことなど、多くの話を聞くこと。そして私はいつか、私が学んだ知識を生かし、海外で小さなことでも誰かのために役立てる自分になりたい。

世界から国境が無くなることはないだろう。そもそも国境とは人間が自分たちの都合で作ったものである。国境は越えられない壁ではない。国境に縛られず世界の人々がお互いを受け入れて支え合っていく世界はそれぞれの意識だけでつくりあげていくことができるのではないだろうか。私は二〇四五年にそんな世界になることを願っている。

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）
世界平和の実現に向けて、私ができること
～人一人の心を大切に～

山口市立秋穂中学校 3年 **久保　愛来**（くぼ　あいら）

私は今まで、「世界平和」という言葉をただ当然のことだと受けとめていた。私が今暮らしている日本は世界の中でも平和な国だろう。

私は平和という世の中を疑うことなく、今あるこの世の中だけを見て暮らしていた。だが、歴史の授業で、世界の悲しい過去を知った。「戦争」、今でも誰もが忘れてはならないこと。日本ではとくに、広島・長崎に投下された原子爆弾のことを忘れはしないだろう。

毎年、八月六日午前八時十五分、八月九日午前十一時二分に黙禱のサイレンが鳴る。私たちはその時、心の中で平和を祈る。そうすることで、忘れることなく、平和を願うのだ。

私は、人々が皆、平和を願うことで世界が平和になるのだと思う。だからまず私ができることは、平和を願うことだ。

今、私たちが生きている世の中には、「国際連合」という国際的組織がある。世界が平和という形になるには、このような組織が必ずと言ってもいいぐらい必要不可欠だ。国際連合がない世界を考えると、少し怖い。国際連合では、戦争という武力での争いを防ぐために、国が互いに仲良くして、話し合いで決めていくためにもある。武力で解決するということは、たくさんの人々を巻き込むということだ。それはもう、あってはならない。今までの過去を消すことは出来ないが、私たちは過去を学び、未来をつくりあげることは可能だ。そのためにも歴史の授業は大事だ。私は授業で、戦争は恐ろしいな、と思うと同時にこんな世の中を生きたくないとも思った。そう思うのは私だけではないと思う。おそらくみんな思うことだろう。といことは、歴史を学ぶことで、人々は平和な世界で生きたいと強く思い、世界は必ず平和になるのだ。

私は、平和への出発点となった出来事を、国際連合の成立だと考えている。けっしてまだ到着点は見えない、いや、到着点などないのかもしれない。だが、一歩ずつ平和に近づいてきている。そう思える出来事が最近ニュースでとりあげられていた。それは、黒人差別から行ってしまった殺人事件だ。黒人だからという偏見を持って人を殺す、というのは何が何でもひどすぎる。私は日本人の中でも肌の色が黒

い方だ。もし私が肌の色が黒いからという理由で、差別やいじめを受けたら、と想像するだけで心が痛い。そんなことはあってはならないと思う。しかし、世界は平和に近づこうとしている。いろいろな国、人たちがこの事件で、改めて差別はいけないということをより深く理解した。私もその一人だ。

そして世界は、「黒人だから」と終わらせなかった。そこで終わらせてしまったらどうなるだろう。おそらく、また同じようなことが起き、何も悪いことをしていない人が、犠牲となってしまう。こんな世の中では、平和など生まれないと思う。だから今私が出来ることは、人の気持ちを考えて行動することだ。

私は、今生きているこの世の中が好きだと思う。しかし、まだ食料不足で困っている人や、学校に通いたくても通えない子もいるのだ。私は、その人たちの力になりたい。おそらく、今の私が出来ることは、募金だろう。

私は、まだ中学生で出来ることは少ないが、小さなことでも積極的にやっていきたい。そして将来は、自分の手で誰かを救い、一人でも多くの人を笑顔にしたい。「笑顔」こそが、世界平和に繋がると思う。笑顔溢れる世界を想像すると、自然に自分も笑顔になった。私はみんなが幸せである世界を望んでいる。

国際連合は、先頭に立ち、「平和」に向かって、一歩一歩近づいている。このような、私たちをリードしてくれる存在は必要だと思う。

私は、「世界平和」を考えてみて、国際連合の大切さを知った。そして、今ある世の中に感謝すると同時に、私が世界平和のために、少しでも出来ることがあることが分かった。

人と人とが互いに尊重し合い、笑顔溢れて、穏やかな世の中。これこそ「世界平和」という言葉がふさわしいと思う。

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）
世界平和の実現に向けて、私ができること

高水高等学校付属中学校 3年 **岡田　凜華**（おかだ りんか）

「平和」とは、何だろうか。私が思う「平和」は、たくさんある。戦争がないということ、差別がなく平等であるということ、住む場所、食べ物、着るもの、即ち衣食住があるということ、学校に行けるということ、家族がいるということ…。

世界は今、平和だろうか。現在、新型コロナウイルスが世界中で流行している。私は、「病気がないこと」というのも「平和」の一つだと思う。新型コロナウイルス以外にも、世界にはまだ消えていない病気があるらしい。世の中にはそれらの病気で今も尚苦しんでいる人がたくさんいるだろう。

私は最近、学校の授業の一環で、アフリカの貧困について調べた。さらに、貧困が原因で起こる教育問題と医療問題についても調べた。教育を受けられない子どもたちは世界中にたくさんいる。その半数以上がアフリカで暮らしているそうだ。学校の数自体が少ないことや、子どもは家計を支えるために働いて学校に行く時間がないこと、学費や材料費が払えないことが原因になっている。子どもが教育を受けたいと思っていても受けられず、識字率が下がり、定職に就くのも難しい。教育を受けられなかった子どもたちが大人になったとき、教育の重要性を伝えられない。これが負のスパイラルである。教育制度を確立し、教育設備を整えて、社会で働くことのできる人材を育てる仕組みが必要である。一方、アフリカの医療において最も重要な問題は医師・医療従事者の不足だそうだ。そのため医師数の増加と医療技術・制度の進歩が求められている。また、病気は必要最低限の設備を持たない貧困層の地域で特に広まりやすい。マラリアは蚊帳や虫除け剤などのシンプルな物で簡単に防げるが、アフリカの貧困地域ではそのような物資でさえ不足している。そのため病気が防げず、多くの人が苦しみ、亡くなってしまう。

私は将来、医療関係の仕事に就きたいと思っている。そしていつかは、海外でボランティアをしたり、青年海外協力隊などの医療グループに入ったりして、アフリカなどで病気で困っている人を助けたい。

そのために私が今頑張っていることは、英語の勉強である。日頃から外国の方と積極的に話したり、英語で日記を書いたりして英語の勉強をしている。また、私は中学一年生のとき、探求学習で宮島へ行き、外国の方々にインタビューをした。当時中学三年生の先輩とインタビューをしてまわったが、先輩に頼りっきりで私は全然上手く話せなかった。それ以来、無力だった自分が情けなくなり、もっと英語の勉強を頑張

ろうと思った。

それから、いつかは留学をしてみたいとも考えている。留学をして、英語を学ぶだけでなく、もっと海外の情勢に目を向けたり、その国の文化について学んだり、コミュニケーション力を向上させたりしたいと思っている。

世界平和のため、貧困をなくすため、病気をなくすために、私が「今」できることは、現状を知り、理解し、それを広めることだ。また、少ない額なら中学生の私でも寄付ができる。少ない金額でも、救われる人がいるのなら、寄付をしようと思う。それから、ペットボトルキャップもワクチンになる。私たちにできることはたくさんあるはずだ。

私たちにとっての当たり前が、当たり前ではない国や地域があることを念頭に置き、今、私たちが当たり前に過ごせている生活一つ一つに感謝して過ごそうと思う。困っている人がいることを理解し、自分にできることを考え、実際に行動に移していきたい。

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）
SDGs が目指す「誰も取り残さない」社会を作るために、自分には何ができるか

野田学園中学校 3年 **野花　みなみ**（のばな　みなみ）

歴史の授業等で「疫病が流行った」というフレーズは目にしたことはあるが、実際にそんな事が起こるなんて、現実離れした悪い冗談のようだと思う。もちろん新型コロナウイルスのことである。国内外を問わず様々な問題がおしよせてきたのは言うまでもない。あげくの果てに慣れない環境でピリピリした人たちの間で対立が起こる。感染者に対する差別、自粛警察、政治への批判、喧々諤々だ。

こうして解決しなければならない問題がまた一気に増えた。ただでさえ世界にはたくさんの問題があるのに、これ以上増えたらたまったものでは無い。例えば国際紛争、貧困に差別、地球温暖化と、あげ出したらキリが無い。

では、これらの問題を解決するには、私に何ができるのか。いつも答えに困ってしまう。結局、「世界のいろんな人と仲良くします」とか、「差別や偏見の意識を持たないようにします」「節電に気をつけて生活します」など、まるでテンプレートのような答えをしてしまう。確かに、間違ってはいないかもしれない。ただ、こんな当たり前のことを言ったところで、解決にはつながらないだろう。

私に何ができるのかを探るためにも、現在、世界でどのような取り組みを必要としているのか、調べてみた。そこで私は初めてＳＤＧｓという言葉を知った。これは世界全体の国際目標だが、「誰も取り残さない」という誓いどおり、恵まれた環境で生活してきた私にも、関わっていることが沢山あった。

私の身近な所だと例えば、１４・「海の豊かさを守ろう」である。私の地元は海に面しており、海浜にごみの破片が流れついていたり、海の中にプラスチックのごみが浮遊していたりすることを目にした事がある。このようなごみは、海に住む生き物が間違って飲み込み、死んでしまうことも少なくないという。海洋生物に影響が起きると、海産物で有名な私の地元も打撃をうけてしまう。

ここまで考えて、もう一度考えてみる。「ＳＤＧｓなどの目標達成をするために、私には何ができるのか」。私の答えは「多くの人にＳＤＧｓを広めること」である。もちろん、国連も認知度をあげるために、頑張っているのは知っている。しかし、私も今まで知らなかったように、いかんせん認知度が低いのである。世界経済フォーラムが行ったＳＤＧｓの認知度調査では、日本は２８ヶ国中最下位であった。内容までちゃんと知っているという人は、８％であった。ごくわずかである。日本国内の話だ

というのを差し引いても、認知度が低いというのは致命的だと思う。例えば、私が海洋ごみを無くすためにごみ拾いをしたとしても、海洋汚染について何も知らない人がまたごみを捨てたりしたら、意味がなくなってしまう。きれいにしたら捨てる人もいなくなる、と考える人もいるが、残念ながら、それが本当ならとっくに解決しているだろう。故意に行う人と違って、罪の意識が無いので知らないという事は恐ろしい。単純に、一人よりも大人数で気をつけた方が効果もある。

結局は、一人一人が日々気をつけていくことが、私たちが身近にできることだと思うが、その「一人一人」が少なすぎては意味が無い。コロナウイルス等の最近になって出てきた問題も、ほとんどこの１７項目の中に含まれている。今こうして生きている人間の、誰一人として無視していい問題ではない。世界中の人々が豊かに幸せに暮らせるような未来を、近い未来にするためには、まず一人でも多くの人がＳＤＧｓについて知り、自分には何ができるか考えることが必要だ。これが私たちが身近にできる、ＳＤＧｓという目標の達成方法だと私は思う。

第27回

高校生によるSDGsに関する感想文コンテスト

優　秀　作　品　集

特賞（山口県知事賞）
SDGs⑯：平和と公正をすべての人に
～善と平和の着眼点～

山口県立華陵高等学校2年 小田　陽菜実（おだ ひなみ）

平和な暮らしとは一体何だろう。

学校へ行って勉強をする、友達と遊ぶ、家族と団欒する、といった争いのない穏やかな日々。それが当たり前であることが平和なのかな、と私は考えました。しかし、そんな生活を送れない人が世界には沢山いて、日本でもかつてそれが当たり前でなかった時代があります。第二次世界大戦、太平洋戦争のあった時代です。

中学二年生の頃、総合の授業で広島平和学習があり、私たちは学んだことを文化祭のステージで発表しました。私がこの「平和と公正をすべての人に」というテーマを選んだのは、その時に発表の脚本担当になった経験を思い出したからです。脚本は同級生のA君と担当の先生の三人で書きましたが、その際、私は原爆など戦争のことについてより多くのことを学び、それをきっかけに「戦争と平和」について深く考えることが増えました。

日本では、苦しい生活を強いられたり原爆を落とされたりしたという側面から、戦争に反対する意見が多くあります。小学生の頃からテレビや授業などでその側面を見てきた私も、戦争をすることや核兵器を使うことには反対で、その意見は脚本を担当した当時から今まで変わっていません。

当時、脚本を書く為に学校の教室に集まった私とA君は、一番最初に担当の先生からこんな質問をされました。

「あなた達は広島と長崎に原爆が落とされたのが正しいことか、間違っていることか、どっちだと思ってる？」

私とA君は、正しくない、良くないことだと答えました。私がそう答えたのは、その数ヶ月前に広島で原爆について実際に展示物を見たり現地の人に話を聞いたりして、被害がどれほどのものかを学んだばかりだったからです。それを聞いた先生は、確かにそうだと頷きました。しかしその後に

「海外では原爆を正しいと考える人もいる。」

と続けました。

「アメリカでは、原爆を落としたことで戦争の終結が早まったという考えがある。そ

れに、日本人が多くのアメリカ人やアジア人を虐殺していた『加害者』としての側面を見られることが多い。」

初めて聞いた話でした。盲点だった、と愕然としたのを今でも覚えています。広島では一切聞くことのなかった加害者としての日本。それがあることに、私は先生の話で初めて気付きました。

「世界には色々な価値観がある。きっと中には受け入れ難いものもあるけれど、私たちはその中で平和を作っていかなければならない。」

これはその時に先生が仰ったことです。脚本を担当してから何年も経った今でも、その発言ははっきりと覚えています。

日本では少数派である「原爆は正しい」という意見が多数派となっている国がある、ということ自体、私はそれまで知りませんでした。原爆が正しいという考え方に触れるのも、それが初めての経験です。それもあって、その話を聞いた直後は、原爆に賛成する意見を受け入れることができませんでした。しかし脚本を書く中で、日本が戦時中に他国へ対して何をしたのか、海外では他にどのような考えがあるのかなどを学び、その意見にも納得できる部分があるなと考えるようになりました。今は、原爆が落とされたのは正しいことか否かという質問に、正解は無いのだろうと思っています。見る視点によっては同じ物事でも考えが大きく変わることをそこで知ったからです。

「戦争」も、同じように見る視点が少し違うだけで考えが大きく変わるのではないでしょうか。平和な日々を取り戻す為に他国と戦う、自分達がもっと豊かになる為に戦争をする、という理由で戦争に賛成する人もいると私は考えています。しかし、そのような考えを持つ人たちも、私のようにこれ以上戦争で犠牲者を出してはならないと考える人も、平和に生きたいという願いはきっと同じです。

「平和と公正をすべての人に」

この目標を達成することは、すごく難しいことだろうと思いました。世界には様々な考えや価値観があり、その中には互いを受け入れることが出来ないものもあるはずだからです。しかし、それらをすぐに否定し一つの意見だけを持ち続けることは良くないと私は考えます。実際に見て、聞いて、自分と違う意見を詳しく知る。それこそが、平和に近づく為の第一歩なのではないでしょうか。

特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）
SDGs①：貧困をなくそう
～貧困と夢と私～

サビエル高等学校2年 大村　咲葵（おおむら　さき）

私は貧困とは自分に関係のないことだと思っていた。だから貧困という問題がどれだけひどい問題かが、理解できたのは中学生だった。小中学生の時の私は、いろいろな偉人の成し遂げたことや生き方を知るのが面白くて、たくさんの伝記を読んでいた。そして中学生の時にオードリーヘップバーンの伝記を読んで、彼女が貢献していたユニセフの活動を知った。彼女自身幼少期は戦争中で、貧困だったことから亡くなる前まで世界の恵まれない子に援助活動をしていた。それを知ってすごく感動した。美人な女優さんとしか思っていなかったが、本当に心がきれいで強い女性だと思った。女優としてではなく、一人の人間として語学が堪能という自分の才能を発揮しながら、子供達と交流している姿は私の頭の中に焼きついた。そして、貧困で苦しんでいる多くの人を救えるようになりたいと思ったのが、高校生の時。世界の貧困に関して、オードリーヘップバーンを尊敬していても他人事のように思っていたが、高校の授業で貧困に苦しむアフリカの子供達の動画を見た。自分より遥かに小さい、八歳くらいの男の子が働いていた。働いているというより、強制労働させられる奴隷のようだった。日本という国で生きている私には、生きているうちに絶対に体験しないことだった。それは鶏を捕まえて、しとめて、食用の肉にまでする仕事。それをロボットのように、顔色も変えずにやっていた。衝撃だった。動画を見ているだけで苦しく辛くなった。裸足で、素手で、血まみれになりながら、家族と自分が生きるために働く男の子を見たことは、私の未来を変えた。

私は、「その子たちを救う活動がしたい」そう決意してから、学校やショッピングセンターなどの街中で貼られている、ポスターにも目がいくようになった。ずっと貼ってあったのに、今まで気づかなかったものがほとんどだった。黒人の女の子の赤ちゃんの写真や、男の子が裸足で立っている写真、このポスターが今まで伝えていたことを自分は知らなかった。今まで素通りしていたが、自分の興味が出てきたから見るようになった。同じ自分たちと平等の命を持っているのに、生きていけない、学べない子がたくさんいることを知った。そして、その子たちの持っている才能までを潰してしまうこと。才能の種は多く植えた方がたくさん咲く。だから貧困で学べない、生きていけないというのは大きな世界にとってどれだけ影響があるだろうか。その子た

ちの中に、これから地球環境問題に尽力する第一人者が出てくるかもしれないし、平和について世界中で活躍してノーベル賞を取る人がいるかもしれない。そんな可能性がある中で、可能性の種まで潰してしまうことは未来の発展の妨げになると思う。そう考えた時に、私に出来ることとは寄付や募金だけでなく、伝えることだと思った。今の状況、日本での取り組み、自分たちとの違いなど、生きることが困難な人たちを知るということは、これから貧困問題を考えてくれる人が増えることかもしれない。日本という温かい環境で育った私たちは、貧困とは遠いところにいる。だからこそ、積極的に知って、行動しなければならない問題だと思う。

お金をどのくらい持っているかではなく、毎日ご飯が食べられること、布団で安心して眠りにつけること、きれいなお湯のお風呂に入れることなど、私たちの生活の一部ですらできない子たちがいる。働いてももらえるのはお小遣い程度のお金で、街のゴミ箱の中をあさって食べられるものがないかを探す。家に帰って弟や妹の面倒を見て、道路脇に布切一枚をひいて寝る。私は苦しくて、そんな生活なんて一日もできない。なぜそんな生活を送らなければいけなくなるのか、本当に不思議だった。貧困問題は重要な問題だと思う。貧困をなくす取組をする日本の団体がいくら頑張っても、解決する日なんて何十年も何百年も先、もしくはこないかもとも思う。しかし、そういうことではなく、ほんの少しでも貧困問題を知って、寄付したり、自分の思いを発信したりすることが大切なのではないだろうか。そして、それを続けることで少しづつでも変わっていくのではないかと信じている。

私にできることは本当に限られた事しかできない。会って話すこともできないし、貧困に悩む人たちを全員救えるような財力もない。それでも、恵まれない子たちにも将来の夢をもってもらいたい。私たちの思う、一般的な将来の夢を。「大人になること」や「学校に行くこと」そんな夢じゃない、自分が素直に思う生きていきたい未来を想像できる夢を持って欲しい。

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）
SDGs③：すべての人に健康と福祉を
～忘れない存在～

山口県立徳山商工高等学校3年　田村　唯菜（たむら　ゆいな）

「おじいちゃん、遊びに来たよ。」

廊下を走り、私と弟は叫ぶ。私と弟の週末はこの一言で始まる。私と弟は曾祖父が大好きだ。しかし、８年前大好きだった曾祖父はこの世を去った。曾祖父との思い出はたくさんある。車でいろいろな場所に連れ出してもらった。特に温泉に行くことが多かった。弟を三輪車に乗せ、三人で散歩をした。この時の曾祖父の笑顔はいつも輝いていた。曾祖父の家によくお泊まりもしていた。曾祖父、曾祖母、私、弟。一つの部屋に四人が一緒に寝ていた。私にとってお泊まりした日の夜は長く暗い部屋の中、曾祖父のいびきが永遠と響いていたのを覚えている。まだたくさんの思い出が私の中に眠っている。

高校入学後、一枚の写真を見つけた。曾祖父が撮ってくれた写真だ。私と弟が桜の木の下で遊んでいる写真だった。曾祖父の趣味はカメラで写真を撮ることだった。曾祖父は私たちにカメラを向けて、よく写真を撮っていた。曾祖父は私たちに大切な思い出を残してくれた。一枚の写真から楽しかった思い出が溢れてくる。しかし、楽しい思い出だけでなく悲しい思いでも再び思い出す。私は小学校の先生に呼ばれ、そのまま家に帰った。家に帰ると母が涙を流していた。私は頭が回らず、その時の状況がよく分からなかった。私は車に乗せられた。車は曾祖父の家にむかっていた。家に着くと私は涙が止まらなかった。初めて大切な人を失った。大切な人を失う痛み、悲しみの感情が混ざり合う。次の日、弟は何も分からず、元気に走り回っていた。そして寝ている曾祖父に気がつく。弟は曾祖父にいつものように話しかけていた。だが、曾祖父の反応がない。「おじいちゃん起きて。」と繰り返す。母が弟の元へ行き、震えた声で話しかけた。弟は何度も母に質問を問いかけていた。弟に笑顔がなくなった。弟は泣いていた。泣き続けた。私も再び泣いていた。私は曾祖母から曾祖父のことについて聞いた。曾祖父は３年前からがんを患っていた。医者にはあと半年しかもたないと言われたそうだ。曾祖父はがんと戦い続けた。

弟が小学２年生になった頃、母と弟、私でスーパに行った。母からお菓子代としてお金を三百円もらった。私は好きなお菓子をお金が余ることがないようきっちり三百円分買った。しかし、弟は私と違った。レジに並ぶと私は弟を見た。弟は手に何も持っておらず、三百円を募金箱に入れていた。私は弟に「お菓子は？」と尋ねた。「このお金で人の病気が治る」と弟は答えた。学校で弟は先生からアフリカの貧しい人達の話を聞いたそうだ。私は弟の行動をみて、アフリカに興味を持ち調べた。アフリカにおいて、保健医療サービスの不足が、妊産婦死亡や新生児死亡を増加させる要因の一つとなっており、アフリカの保健医療施設においては医師や看護師などの医療人材、医療機器や材料、医薬品、施設運営費などの資源不足、患者記録や臨床指標、疫学データなど情報不足という問題を抱えており、このような状態で十分な医療サービスを提供することはできない状態となっているという記事を見た。多くの人が苦しみ、病気と戦っている。貧しさという理由で多くの人達が亡くなっているという事実。私の頭の中に曾祖父の顔が横切った。曾祖父は医療を受けられるから私たちとの時間があった。曾祖父は病気に負けることなく戦い続けたから思い出があった。私はあの時の弟の行動の意図がわかった。弟も曾祖父という大切な人を失い、悲しみという思い出がある。過去を変えることができるのなら変えたい。しかし、過去は変わらない。弟は多くの人の力になろうとしていた。

曾祖父が亡くなった後、曾祖父との思い出を毎日振り返っていた私だった。だが、アフリカの人達は大切な人との時間も思い出も作ることが出来ずに、消えていく。私はとても幸せだったのだと気づいた。大切な人との時間も思い出もたくさんできて。曾祖父を送り出すこともできた。

弟は募金箱にお金を入れている。私はもう一度、弟に尋ねた。「お菓子は？」と。弟は迷うことなく、お金を入れる。私はお菓子をやめた。このお金で何人の人の命が救われるだろうか。

現在、私はSDGsについて知り募金は大切なことだと改めて学んだ。私たちに今できることは寄付・募金、ボランティアだ。弟の行動を忘れず、苦しんでいる人達に協力しよう。私の意思は固まった。今日も私の知らないところで出会ったことのない人達の大切な命が失われている。世の中に目を背けず、私たちが出来ることを精一杯やろう。幸せな私たちだけが出来ることだから。将来、貧しい人でも笑顔で涙を流さず、過ごせる世の中になってほしい。

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）
SDGs③：すべての人に健康と福祉を
～医療問題にどう向き合うか～

高水高等学校2年　松本　彪（まつもと　たける）

人間にとって、健康ほど幸せなものはない。自分自身が健康であること、大切な人が健康であること。一見当たり前のように思えて、当たり前ではない。その人々の健康を支えているのが、「医療」である。現在、その医療が世界中で平等に行われていない。この問題にどう向き合うか。

ここでは、医療格差という問題を扱う。私は二つの観点からこの問題を考える。医療従事者の数、そして医療の在り方という点だ。それぞれの観点から目標達成へと近づく方法を挙げる。

医療格差とは、医療サービスを受ける際に生じる諸々の格差のことである。例として、医療機関が都市部に集中することで生じる地域間の格差や、高度なサービスが高額で提供されることで生じる所得階層間の格差などがある。ここから窺えるように、世界には約七十七億人がいて住んでいる地域や所有している財産は様々である。そのなかで、医療を平等に行えるようにするのは極めて難解な課題なのだ。

世界の中で医療格差が大きい地域が発展途上国である。発展途上国では、経済成長を重視しているため、工場から排出される廃棄物やガスによって環境が汚染されている地域が多い。そのせいで、その地域周辺に住んでいる人々は病気になり、治療を受けるために医療機関のある都市部にいかなければならない。しかし、都市部までいく交通機関が整備されていないのでお手上げ状態。運良く医療機関にたどり着けたとしても高額な治療費を支払えないので、結局病気を治せない。そうして、時間とともに病状は悪化する。このようなサイクルが繰り返され、彼らは医療を受けることができず、なす術がないのだ。加えて、そのような地域では医療人材、医療機器、医薬品、医学の情報が不足しているため、医療サービスの質も高くない。

先進国でも同じく、医療格差がある。アメリカでは、国民皆保険制度がないため、収入の少ない世帯は医療サービスを受けることができない。日本では、都市部と地方の間で医療格差がある。その大きな要因が、地方の医師不足だ。日本の医師の多くは、都市部に集中している。さらに、地方の県内格差も注目されている。県庁所在地周辺

地域では医師は足りているが、そこから離れるにつれて医師の数が足りなくなるという現状だ。

そうした医療格差をゼロにすることは不可能に近いが、格差をゼロにするのが目的ではない。格差を小さくしていくことが重要なのだ。

医療従事者の不足を改善するアプローチを考える。日本では現在、医療従事者が不足していると知り、私は日本の医療関係従事者数の資料（厚生労働省より）を見た。すると、驚くことに一九五五年以降、資料にあるすべての項目で増加し続けていたのだ。では、何故不足しているのか。それは、病状数の多さが理由だそうだ。医療従事者は増加しているが、それを上回るほど患者が多いのだ。

そこで、医療の在り方を見つめなおす。医療従事者が足りないというのであれば、現代の科学技術を応用し、今までの医療形態を変化すればよい。つまり、医療従事者を助ける「テクノロジー」を導入し、患者になる「リスク」を低下させるという考えだ。

近年のテクノロジーの進化は著しい。そのテクノロジーを医療現場で活用するというのも有力な手段だ。ＡＩを補助ツールとして使用することで、経験が少ない医師も患者とのコミュニケーションをより親密にでき、総合的に正確な判断がしやすくなる。複数人の医師が必要な仕事もＡＩの力を借りることで、より少ない人数でできるようになる。また、ドローン技術なども遠隔治療を可能にする。

一方、違う見方をすると患者の数自体を減らせばよい。病院といえば、患者が生活の中で体に何らかの異変を感じて訪れる場所だ。このような病院のシステムも残しつつ、予防医療を重視するシステムを導入するべきだ。そうすると、不必要な入院や診察が抑えられ、結果的に患者の数を減らすことができる。

日本では前述したような方法で医療格差を小さくできる。しかし、そのような方法をとることが難しい発展途上国では、やはり先進国による支援が必要である。グローバル化が進み、各国間の医療ボランティアなどを通して援助できるようになった。さらに、クラウドファンディングといった新しい支援方法も現れた。そのような支援が積み重なれば、大きな力となり、確実に目標達成に近づく。

冒頭でも述べたように、人間にとって最も大切なものは「かけがえのない命」である。その命を医療で守ることができるのならば、医療問題から目を背けてはならないし、変化する時代に応じて医療の在り方を変えなければならない。そうして、地球上に存在する命をひとりひとりの小さな力で守っていきたい。

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）
SDGs⑤：ジェンダー平等を実現しよう
～性別が社会進出の足かせにならない未来へ

野田学園高等学校2年　河村　樹里（かわむら　じゅり）

一二一位。

これは世界経済フォーラムが毎年発表する『ジェンダーギャップ指数二〇二〇』調査対象一五三カ国における日本の順位だ。政治と経済の分野で他国と大きく差を作ったことによって過去最低の結果となり、Ｇ７の中では最下位である。現在行っている探究学習のためジェンダーについて調べていた私は、初めてこの事実を知ったとき憤りを通り越して呆れを感じたのを覚えている。日本にはジェンダーに対するステレオタイプというものが社会に、そして国民の意識に未だ根強く残っているという証拠に他ならないからだ。私は、労働に関する分野での男女格差が生じ、このような結果となってしまったのは、生まれ持った性別そのものによるものではないと考える。「男性はこう」「女性はこう」という性別に関わる凝り固まった思想や社会の風潮などによって、女性の社会進出ないし指導的地位への昇格、男性の育児参加率などが伸び悩んだり、所得の差が生じたりしているのではないだろうか。ここでは、こういった性別役割分業意識がもたらす労働市場でのジェンダー不平等について考えていく。

まず、ジェンダーステレオタイプと無意識のバイアスについて触れたい。性別役割分業意識はジェンダーステレオタイプに起因することがほとんどと言えよう。その例として、「女性（妻）は家事・育児、男性（夫）は労働とその収入による妻子の扶養」というものがあろうかと思う。勿論これはもはや廃れて然るべき思想だということを頭の中では理解していても、社会の風潮はなかなか変わらない。言動にも無意識のうちにステレオタイプが現れているかもしれない。人々は未だ、社会的な役割をなにかにつけ「女性的」「男性的」と区別しがちではないかと私は感じている。そういった無意識のバイアスが社会的な活動の足かせとなってしまうことも少なくないだろう。私自身、社会に出たら何かにつけ女性であることを強調されるのかなと不安に思う事がある。「女なのに」「女のくせに」「女だから」……そう言われてしまうのではないかと。無論これも社会に対するある種のバイアスのようなものと言えようが、戸籍上の性が現在の社会生活に生き辛さを生じさせることがあるというのもまた事実な

のだ。

次に、労働の種類におけるジェンダー格差について述べたい。『図表で見る男女格差ＯＥＣＤジェンダー白書２』によると女性が上級管理職に昇進しづらい要因に、介護や育児といった無償労働をするためにキャリアを中断する可能性が高いことと、パートタイムで働く傾向が強いことが挙げられるそうだ。一方で男性は非常に長時間の労働に従事する傾向にある。依然として女性が家事・育児・介護の無償労働の大部分を担っている現状なのだ。調査によると日本は先進国の中で女性の無償労働従事の割合が最も多い国の一つで、労働の四分の三を負担している。どうやら女性は長時間の無償労働のために有償労働に十分に従事できず、男性は有償労働のために無償労働を分担しづらくなっているようだ。正社員として保障された収入を得たい母親や、家族との交流を多く持ちたいと考える父親などにとってはこの事実は受け入れがたいものであろう。妊娠・出産・子育てでいつ職場復帰できるかわからない女性は妊娠を機に退社ないし転職したほうが良いという声も耳にする。これは女性の昇進を難しくする他、賃金の格差も生むだろう。また、男性は労働市場で懸命に働くものだというステレオタイプが育児休暇を取りづらくさせているのではないだろうか。そしてこれはＯＥＣＤ加盟国である三六の諸先進国のデータであるのだから、途上国や宗教観などを含めた世界中の男女格差、さらに言えば男尊女卑の風潮は推して知るべしというものだ。我々はいい加減、性別による社会的役割の固定というものを取り去るべきである。

さて、まとめに当たり言っておきたいのは女性が男性と比べて格差があるとはいえ女性に対するステレオタイプのみの改善に躍起になるのでは労働市場でのジェンダー平等の達成には繋がらないということだ。女性だけでなく男性を取り巻くステレオタイプや、一人ひとりが持つバイアスを解消していくことが欠かせないのである。またここではＳＤＧｓ目標⑤の内容に即し男女の二つの性に限って話をしたが、ジェンダーは本来男女のたった二つに分けられるものではないということも明言しておきたい。性に対する凝り固まった考えをこれ以上放置しておかないために、学生のうちから義務教育や高等教育の一環としてステレオタイプについて学習する機会を設けるべきではないだろうか。新しい世代が紡いでいく社会だ。その社会が女性が指導的地位で活躍し、男性が女性と無償労働を分担し合えるものとなるよう、性に対し公平で寛容な視点で労働に従事する私たちでありたい。

佳作
SDGs④：質の高い教育をみんなに
～よりよい教育を受けるために～

山口県立華陵高等学校2年　山本　結花（やまもと　ゆいか）

「先生死ぬかも」という言葉を聞いたことはあるだろうか。これは、八月十四日にTwitterでトレンド入りを果たした言葉だ。とある生放送の番組で、“教職員の働き方を変えるべきだ”という世論をつくるためにこのハッシュタグがつくられた。全国の多くの教師が、教員の労働環境がいかに劣悪かを訴え、教員の働き方改革を求めた。

学校教員の労働環境の悪さは、はっきり言って私たち学生の教育にも悪い影響を及ぼしている。私たちに勉強を教えてくれるのは他でもない学校の先生方であり、その先生方の教えるための環境が整っていなければ質の高い教育をすることはできない。今の環境は、色々と不十分なことが多すぎるのだ。

まず第一に、仕事の量が多すぎる。授業以外にも部活動の指導や食習慣の指導、集団生活での思いやりの心を育てる、地域行事など、授業以外の仕事がとても多いのだ。放課後、授業の準備の他にあのような膨大な量の業務をこなさなければならないのだから、必然的に残業時間も多くなり、疲労から体調不良を起こしてしまう人も多い。より良い指導のためにと課した仕事で肝心の教師を壊してしまっては、本末転倒だ。勉強を教える職業なのだから、授業だけに集中できる環境であることが最善のように思う。部活動は専門知識がある方を雇えば良いし、食習慣なんて家庭で指導するものだ。思いやりの心も、わざわざ教える時間をもうけずとも人と関わるうちに自然と身に付いてくるものである。やらなくても良いことまで身を削ってやる必要はないだろう。

第二に、教育現場の人手不足の深刻さだ。これは、前記した仕事量の多さにも関係していると思う。私たちは、小学生の頃から先生という職業はかなりのブラックだと知っている。あまり大きい声で言うものではないがという枕詞つきで、「教員になるのはおすすめしない」と色々な先生から言われるからだ。年に数回程度このセリフを聞き続けてきたため、自然と教職の過酷さが分かってくる。このことが、教員にはなりたくないと思うことにつながっているのではないだろうか。もちろん先生方が悪いというわけではない。今のこんな労働環境ではおすすめできないのは当たり前だ。こ

の“当たり前”が駄目なのだ。人手が足りない分を今いる先生方で補わなければならなくなり、ただでさえ多い仕事量がさらに増えてしまう。当然、環境はさらに悪くなる。そうなるとさらに推奨できない職業として確立してしまい、それがまた人手不足を悪化させる要因になる。また、現職員の方が過労が原因で亡くなってしまったり、心の病気にかかってしまったりする事例が後を絶たない。人手が足りないということは、このような悪循環を生み出してしまうのである。

ここまでブラックな勤務体制でなぜ大きな働き方改革がされないのか。それが、私が最初に紹介した話題とつながってくる。そう、世論がないのだ。私たちはほとんどの人が１０年は学校に通っている。そしてその間、忙しそうに働く先生方を見て「教員は大変な仕事だな」と思って過ごしていた。そこまでが日常であり、“普通”になってしまっているのである。ある時から突然変わってしまっただとか、明らかに授業内容が変わっているだとかそういう出来事が無いため、先生が忙しすぎることに疑問を持ち辛いのが現状だ。人手不足で人材教育もままならないくらいのこの状況に慣れてしまった。

前記した通り、質の高い教育を私たちが受けるためにはまず教員が健康的に働ける環境づくりが必要である。そしてそれを進めるための足がかりとして、まず今の状況が普通でないことを広めることが大切だ。どんなに大きく動いても大げさなことはないので、とにかくこちらの意見を聞いてもらうための母数を確保しなければならない。今のネット社会だと、高校生の私でも力になれる。最近ならそれこそ、ハッシュタグをつけてつぶやけば良い。

質の高い教育をつくるために、教えられる側の私たちにもできることがある。先生方の労働環境は自分にも関係があることを知り、より良い教育を受けられるように私たちも今できることをするべきなのだと考える。他でもない私たちのために。

佳作
SDGs⑤：ジェンダー平等を実現しよう
～男女平等の国づくり～

山口県立徳山商工高等学校3年　水津　葵（すいづ　あおい）

人は皆平等である。そんなことはない。この日本でも地域によって根強い不平等が残っている。「女性または男性だから」という男女の違いをカラダのほかに、社会的・文化的な役割の違いを無意識に考えてしまうことをジェンダーという。例えば、「女性はピンクで男性は青」「女性はスカートで男性はズボン」と決めつけることだ。こういう些細なことが大きな不平等や差別を生み出しているのではないかと私は考えている。

私はこの作文をきっかけにマララさんについての本を読んだ。彼女は強い。これが私の最初の感想だった。パキスタン生まれの彼女は女性だからというだけの理由で学校に行くことが禁止されていた。そこで「女子も教育を受けるべき」と声を上げた。しかしそのせいで下校途中銃撃され頭を打たれてしまった。世界中が見守るなかイギリスに搬送され、一時は生死をさまようが一命を取り留めた。彼女はやはり強かった。女性のために声を上げ世界中の少女達に教育の機会を与えたマララは十七歳という若さでノーベル平和賞を受賞した。私はマララさんのように大きなことはできなくても、この日本から、世界中から、差別をなくしていきたいと改めて感じることができた。

もう一つ、私はLGBTについて焦点をおいてみた。最近は耳にする機会も増えてきたのではないか。LGBTとは、レズビアン（女性同性愛者）、ゲイ（男性同性愛者）、バイセクシャル（両性愛者）、トランスジェンダー（生まれたときと自分の認識の性が異なる）、この４つに分けられている。私も実際女性に憧れていたときがあった。私の場合、憧れではあったがこの憧れを好きだと思う人もいるわけであり感情は人それぞれなのに、日本人は自分と違う人を馬鹿にする。普通とはいったい何なのか。性が異なる人を好きになるのが普通なのか。そんなの自分の考えであり、自分の中での普通である。「自分と違うからこの人は普通ではない」と思われるのがどれだけ辛いこ

とか。もう少し考え、自分と違う人を馬鹿にするのではなくそういった考えもあるのだと視野を広げてほしい。あなたのその一言がどれだけの人を傷つけているのかを考えてほしい。

健康や教育の部分では女性の活躍を目にすることが多い。しかし、経済や政治の部分で女性の活躍を見ることは少ない。実際、政治ではまだまだ男性の参画が多く、女性の政治家が少ない、女性の政治参加が少ない。私はもっと男性と女性が同じくらい輝けるようになってほしいと思っている。

日本は、目標５「ジェンダー平等を実現しよう」の達成率が非常に低い。世界でみる日本の男女平等の度合いは一一四カ国中一一〇位であった。この順位をみてどう思うだろうか。私自身とても驚いたが、よく考えてみればこの順位に納得する部分も多い。女性の活躍の場を国が、国民が邪魔をしているのではないか。自分には関係ないだろうと思うのではなく、皆が一人一人考えることで不平等や差別がなくなるのではないだろうか。

私は自分たちができることがないかと考えてみた。そこで実践してみようと思えたことが二つあった。

まず一つ目は、ジェンダー平等について知ってもらうということ。興味を持ってもらうということ。実際、ジェンダー平等について知らない人の方が多い。そこで私はポスターを作り学校の校舎に張ってもらうことにすると、校内だけではあるが約六〇〇人に知ってもらうことになる。また、それを見た生徒が家に帰りその話をすればもっと知ってもらうことができる。最初は興味を持ってもらうことから入り、そこから自ら調べるに発展し、周りに発信していくといった好循環を生み出していくことがこれから重要になっていくと考えた。

次に二つ目は、女性に対しての「当たり前」をなくすということ。女性は仕事もやり、家事もやり、育児もやるのが男性からしたら当たり前になっていると思う。男性が家事や育児をすると「イクメン」だなんて言われ、評価される。まずそれが間違っている。男性が積極的に家事や育児に参加することで女性の負担も軽減されるため、「分担」ということを当たり前にしていける世の中になればこの目標も改善されていくと思う。

目標５「ジェンダー平等を実現しよう」の目的は、全ての人が性別に関係なく、平

等に安心して生活できること。そのような世の中にしていくには、私たち一人一人が理解し、女性差別から目を背けるのではなく、向き合い、そして自ら考え発信していくことがこの目標を達成する鍵を握っているのではないだろうか。

みなさん、この目標を一緒に解決し、男女差別のない国にしていきませんか。

２０２０年度募集要項

第６０回「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」山口県大会

■テーマ

作文の題目は、「①国連創設１００周年の２０４５年、こんな世界にしたい」、「②SDGsが目指す「誰も取り残さない」社会を作るために、自分には何ができるか」又は「③世界平和の実現に向けて、私ができること」のうちいずれか一つとします。

なお、作文の内容は、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などを通し、国際連合について述べたものとします。

■応募資格

県内在住又は在学の中学校生徒または左記に準ずる在日学校在学生

■原稿制限

４００字詰め原稿用紙４枚以内

■賞

特賞：２名、優秀賞：２名、特別賞：１名（副賞：図書カード、参加賞：文房具等）

第２７回「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」

■テーマ

題目は自由。作文の内容は、持続可能な開発目標（SDGs）のうち、いずかれ一つを選択し、選択した開発目標について、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などについて述べたものとします。

持続可能な開発目標（SDGs）

「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする

１７の国際目標

①貧困をなくそう
②飢餓をゼロに
③すべての人に健康と福祉を
④質の高い教育をみんなに
⑤ジェンダー平等を実現しよう
⑥安全な水とトイレを世界中に
⑦エネルギーをみんなにそしてクリーンに
⑧働きがいも経済成長も
⑨産業と技術革新の基盤をつくろう
⑩人や国の不平等をなくそう
⑪住み続けられるまちづくりを
⑫つくる責任つかう責任
⑬気候変動に具体的な対策を
⑭海の豊かさを守ろう
⑮陸の豊かさも守ろう
⑯平和と公正をすべての人に
⑰パートナーシップで目標を達成しよう

■応募資格

県内在住又は在学の高等学校生徒（全日制、定時制、通信制）、高等専門学校生徒（ただし、３年生まで）

■原稿制限

４００字詰め原稿用紙５枚以内

■賞

特賞：２名、優秀賞：２名、特別賞：１名（副賞：図書カード、参加賞：文房具等）

共　通　事　項

■締切及び審査と発表

令和２年９月３日(木)必着　主催団体において審査し、１０月下旬に入選者に連絡します。

■応募作品の取り扱い

①応募作品は返却しません。②入賞作品の版権は、主催団体に帰属します。③作品は自作･未発表のものに限ります。④中学生による作文の上位入賞作品については、全国コンクールへ出品します。

■個人情報について

応募者の個人情報については、応募者の選考、連絡のために利用します。これらの目的の他に応募者の個人情報を利用することはありません。

■応募先・お問い合わせ先

〒７５３－８５０１　山口市滝町１－１　山口県観光スポーツ文化部国際課内
日本国際連合協会山口県本部　TEL 083-933-2340 http://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/

令和２年１２月発行
発行元
日本国際連合協会山口県本部
〒753－8501 山口市滝町１－1
山口県観光スポーツ文化部国際課内
TEL（083）933－2340

日本国際連合協会山口県本部